豆村偽太郎2011

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
豆村偽太郎２０１１

【Ｎコード】
Ｎ７５９５Ｒ

【作者名】
ごはんライス

【あらすじ】
もうちょい書き足そうかな。

1

偽太郎は会社で女子社員に告白された。
「えっオレ、奥さんいるんですけど」
「不倫しましょう」
偽太郎は汗が出る。その女子社員は妻よりかわいい顔をしていてボインなのだ。
悩む。しかし、悩んでばかりいても先に進まないので、ひとまず、妻に電話してみた。
「あの魔痔子(まじこ)さん。オレ、不倫しようかどうか悩んでるんだけど、どうしたらいいかな」
「そんなの自分で決めなさい！　自己決定権のある時代よ。その代わり、リスクは背負うのよ。離婚することになっても自己責任ね」
「そんなぁ」
厳しい妻である。
偽太郎は、ひとまず女子社員には考えさせてくれと言っておいた。そう簡単には結論が出ない。無論、独身ならすぐにオッケーしているが。
仕事が終わり、偽太郎は首相官邸に向かった。震災関係で首相と対策を練るのだ。
満員電車に乗ってる途中、立ってる偽太郎の前に、すごく太った女が座っていた。
偽太郎が、すげえでぶだなぁと眺めていたら、太っちょ女がじろりと睨むので、偽太郎はあわてて目をそらせた。
どきどきしてきた。まだ睨んでる。体重１００キロ以上あるな。ケンカしたら絶対に負ける。
偽太郎はかばんに入ってる愛妻弁当にある箸を思い出した。
いざとなったら、これで、やつの目を突いてやろう。
しかし、その女は次の駅で降りた。

「よかった。日頃の行いがいいからだなきっと」
前向きなのが偽太郎のいい所であり、悪い所だ。
偽太郎はでぶ女が座っていた場所に座った。
震災に関する会議は深夜まで続いた。
「首相。そろそろ、僕帰ります」
「えっ偽っちゃん。もう帰るの」
「もうって、もう一時ですよ」
首相がすごく悲しそうな顔をする。指導者の孤独というやつだろう。
偽太郎は首相を抱きしめ、頭をなでた。
「きゅーん。きゅーん」
すごくかわいい。
偽太郎は思い出して、聞いてみた。
「首相は不倫についてどう考えますか」
首相の顔が赤くなってる。まずい。何か勘違いしてる。
「あのその。そういうことではなくてですね」
「偽っちゃん……」
首相がベッドに行こうと言う。偽太郎、ピーーーンチ！
うんち。あ。今の関係なし。
偽太郎はやばいやばいと焦る。変な汗が滝のように出る。
ひとまず、ケータイで妻に電話してみた。
「何よこんな時間にバカ。むにゃむにゃ」
「魔痔子。首相にベッドに誘われてんだけど、どうしよう」
「そんなの自分で決めなさい！　自己決定権の世の中よ。その代わり、リスクは背負いなさいね。お尻から血が出ても自己責任よ」
「そんなぁ」
鬼のように容赦ない妻である。
首相が偽太郎の腕を引っ張ってしつこいので、偽太郎は首相のほっぺたを殴って逃げた。
「ひっくひっく。ひっとらえよ。あの男をひっとらえよ」
「アイアイサー」

身体のでかいＳＰどもが追いかけてくる。
偽太郎は官邸を出てすぐに、自転車に乗ったおまわりさんを発見した。
「ポリスマン！」
「変な言い方すんな」
「自転車貸して！」
警官は、理由を尋ねる。
そうしてるうちに、ＳＰが両脇から偽太郎を抱えた。
「ポリスマン。助けて！」
偽太郎が叫ぶと、警官は拳銃を構えた。
ぱぁぁぁぁん。
「ぐはっ」
何と偽太郎に命中してしまった。
ＳＰと警官はあわてる。
「早く救急車呼べ。主役が死んだら話にならねえ」
「アイアイサー」
野良犬がわぉーんと吠えた。

つづく

2（完結）

偽太郎が目が覚めたとき、そこは病室であった。
何か様子がおかしい。
「わん」
何だ今の声、と思い、手を見ると肉球。
偽太郎が、机の上に置いてあった手鏡を見ると。
犬。
「？？？？？」
医者がやって来た。
「わんわんわん」
「まぁ偽太郎さん、いや、偽っちゃん。落ち着いて聞いてください。今からパチンコに行くので手短に説明します。偽っちゃんの身体は正直、もうダメでした。そこに脳死状態で身体は生きてる犬が運ばれたのです。その犬に偽っちゃんの脳を移植したというわけです。以上」
「わんわんわん」
偽太郎は悲しい。神も仏もあるものか。
妻が迎えに来て、犬になった偽太郎を抱えた。
「あなた、軽くなったわねぇ」
「くぅん」
妻はパートに出るという。なにしろ、偽太郎はすでに犬なので会社に勤務できない。

妻はペットショップでリードを買う。
「わんわん」
「あなた。走らないで。ふぅふぅ」
偽太郎は四つ足で小走りする。妻は引っ張られて追いかける。
果たして、この物語に結末はあるのか。

それは、すべて読者の想像力次第であろう。作者が語られるのはここまでである。

偽太郎がこの後どうなるのか。保健所に連れて行かれるのか。妻のバター犬になるのか。それはすべて読者の脳内にある。作者には解らない。

おわり

3

おわらないで、もう少し続けてみます。

犬になっちまった偽太郎は、小説を書くことにした。正社員もバイトもできないゆえ、そうするしかない。
最初、肉球でどうやって万年筆持つんだと思っていたが、よう考えたら、パソコンがあった。
偽太郎は、パソコンなら肉球でも叩くだけだから大丈夫だなと思う。とにかく、男子たるもの、いつまでも女子に養ってもらっていてはいかん。早くプロ作家にならねばならん。
偽太郎は、サイトに書きながら、新人賞に送った。まず、サイトで公開して見て読者の反応を見る。んで、長編の連載が完結すると非公開設定にし、改稿し、新人賞に投稿する。
小説家は狭き門ゆえに、なかなか合格しない。
けど、二次を突破して一次に残ったり、じょじょに実力をつけている。根気よく続けるのが大事だなと、偽太郎は思う。
魔痔子がパートから帰ってくると、ケンカになる。魔痔子が、あたしは仕事でひいひい言ってる間、あなたは家でごろごろ、なんてぬかす。冗談じゃない。小説書くのに四苦八苦してるのに。
しかし、実際養ってもらってるのは事実なので、偽太郎は、家を飛び出し、屋台へ行く。妻のへそくりを、動物的勘で探し出し、それで飲む。
「ひっくひっく。早くプロ作家になりたいなぁ」
「偽っちゃん、飲みすぎるなよ」
「うるへえ大将。ちくわくれ。ちくわ」
野良犬がわぉーんと鳴く。
偽太郎はだんだん眠くなってきた。とはいえ、家には帰られない。

歩いて、近所のビデオボックスに行った。
「ふぁあ。眠たい」
ボックスの中で、ＤＶＤも観ずにすやすや眠る。普段の執筆疲れ。
実にぐっすり眠る。
深夜の二時に目覚める。急に書きたくなってきた。
備えつけのパソコンを叩き始める。実に調子がいい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7595r/

豆村偽太郎2011

2011年10月9日19時05分発行